【6】

氏　名（本　籍）	丸山敏秋（千葉県）
学位の種類	文学博士
学位記番号	博甲第204号
学位授与年月日	昭和59年3月24日
学位授与の要件	学位規則第5条第1項該当
審査研究科	哲学・思想研究科　倫理学専攻
学位論文題目	中国古代医学の形成とその思想的基盤及び特質 —〈内経医学〉を中心として—

主　査	筑波大学教授	文学博士	高橋　進
副　査	筑波大学教授	文学博士	湯浅泰雄
副　査	筑波大学教授	文学博士	三枝充悳
副　査	筑波大学教授	文学博士	長瀬　守
副　査	筑波大学助教授		鈴木達也

論文の要旨

本論文は，現存する中国最古の医書と目される『黄帝内経』（『素問』及び『霊枢』）の成立事情，伝来，版本等に関する書誌的精察及び内容の攷覈を通じて，同書における古代医学を体系的に整理再構成し，且つその基本的性格を論究することを中心として，古代医学の遺した諸記録に見られる思想的特質を解明し，総じて中国古代医学の形成過程及びその思想基盤・特質について詳述論到したものである。論文全体の構成は，序論及び本論8章と結論から成り，400字詰原稿用紙933枚に及ぶ。

序論は，本論文の目的，時代設定，各章の意図と内容の概略，資料等について述べる。第一章及び第二章は，医学及び医学関係資料の検討を俟って明らかにさるべき中国古代医学の思想的基盤をなした諸思想，即ち天，気，陽陰，五行等の思想及び道家等の養生思想を，論述の都合上，結論をあらかじめ先取りした形で指摘し，それらの思想内容，特徴について考察を加えている。

第三章「呪術から医術へ」は，中国古代医学が形成されつつあった先秦から漢初における当時の医療の実態について論じたもので，まず巫を中心とする呪術と医術との関係を統観し，次いで巫より派生した医の両様の形態，即ち『周礼』の医官制度及び『史記』録する所の扁鵲と淳于意の名にかかる民間医の医療活動の考察を通じて，超自然的存在の祟禍と見做す呪術的病因観を拡大し，疾病は体内の気（気血）の鬱滞ないし逆調であり，節度，節制なき生活による外界の気の感応による

ものとする気の概念に基づく疾病観が，医家の間に浸透して行ったことを論証し，それがやがて『黄帝内経』医学（以下「内経医学」という）の根底となる事を指摘する。さらに「内経医学」成立以前の医学関係資料として看過し得ぬ『史記』倉公伝に現われた淳于意の症例研究的な治療記録によって彼の医療観を考察し，漢初における相当高度に発達した脈診や治療法を含む医術の実態を究明するとともに，その基本的な病理観，病理解釈の原理等が，「内経医学」に共通する部分の極めて多いことを指摘する。

第四章「『黄帝内経』の書誌について」，第五章「『黄帝内経』の成立に関する考察」は，著者が書誌学的に最も精察・努力を傾注した論攷である。即ち著者は，『素問』と『霊枢』に分巻されて伝わる『黄帝内経』の書誌及び「内経」の成立事情と，これに関連する諸問題について，従来の諸説を整理し，批判的検討を加えるとともに，詳細な論証を経て新知見を提示する。この両章で著者の導出した結論のひとつは，原始『素問』の巻数は従来の通説では9巻とされていたが，考証の結果，それは8巻であると見られること，第二は，現在本『素問』『霊枢』を『漢書』芸文志所載の『黄帝内経』と同一視する従来の通説には何ら確定すべき根拠のないこと，第三に，素・霊二書の成立時期を確定することは現状では困難であるが，著者の論証は，黄帝伝説や黄老思想の影響のもとに，前漢末の『七略』以降，後漢初期にかけて成立したのではないかと推定するに至っている。第四に，『黄帝内経』別伝のテキストと見られる皇甫謐の『甲乙経』と楊上善の『太素』について，わが国に伝わる仁和寺本『太素』にも言及・考察を加えつつ，諸本を検討し，『黄帝内経』の詳密な文献批判を行う上で欠くことのできない資料であることを指摘する。第五に，『太素』と素・霊二書の本文及び諸注を含めて校勘を行い，『太素』は素・霊二書の本文を類別編纂したもので，二書より後出のものと論定する。これに対して近年山田慶児氏の唱える，『太素』は古代の『黄帝内経』の原型に近く，従って素・霊二書は『太素』の後に成立したものとの説を否定し，むしろ従来の説を支持する結論を導き出している。

第六章「内経医学の大要」は，「内経医学」の内容を，生理・病理（病因を含む）・診断・治療・養生・自然と人間との関係の認識，という6項の視点から体系的に再構成し，その医学体系の基本的ないし思想的特質を究明すべく総論的な考察を加えている。著者はかかる考察を通じて，「内経医学」に最も重要な概念は「気」であり，「気」の体内ルートとしての「経路」が発見されたことによって，蔵府や身体各部の密接な連絡・相関性が見出され，人間の有機的・全体的な把握が可能となったこと，人間が自然界と密接な相関的対応関係にあり，自然界の循環的な変化推移に応じて，人体の生理や病理現象が変化するとの認識をもち，現在研究が進められているバイオリズムの先駆的思想をそこに見ることができること，人体各部と全体についても，部分が常に全体を証示する対応関係にあり，さらに上下・左右・内外等の相関性を有すること，等々を論証する。

第七章「内経医学における心身観の特色」は，先秦，漢初の心身観との関連において，「内経医学」の心身観を考察し，心一気一体の機能的構造のもとに，心身が一体不可分の関係にあるものと明瞭に認識されていたことを論証する。即ち，身体症状（疾患）と精神症状とは区別されるべきものでないとの認識は，前述の「気」の概念や「経路」の発見に通ずるものであり，東洋医学伝統の「心

身一如観」がそこに典型的に見られるとする。

第八章「内経医学と陰陽五行論」は，「内経医学」における五行論の適用を具体的に考察し，五蔵への配当が月令系のそれと全く異っていること，陰陽論との融合が不十分で，配当の不一致や矛盾する記述が見られること等を論証し，それは医家が既存の五行論を単に形式的に用いたのでなく，様々な臨床的試行錯誤を経て行ったものと論じている。また，「内経医学」では，四時の推移と人体・疾病との関係が重視されているが，理論的に四時・陰陽という偶数概念と五行という奇数概念とを融合させようとして却って不統一を招き，五行の「土」の扱いに二様の方法を生じ，その二重構造が後の中国伝統医学にそのまま踏襲されたとしている。さらに著者は，「内経医学」に極めて特徴的な三陰三陽説があり，それが陰陽論の発展であるとともに，医家の独創的理論であることを解明し，その起源が「経脈」の発見にかかわるものであることを，近年出土の『馬王堆脈書』等を根拠に論証し，次いで「内経医学」では「経脈」の呼称として用いられていた三陰三陽説が，やがて『傷寒論』に至ると疾病の病態・病症を表わすに至り，また「運気論医学」では天気の名称として用いられたこと等，三陰三陽説の起源と展開を詳論している。

結論は，以上の論旨をまとめて，本論文の成果と主旨を明らかにしている。

審　査　の　要　旨

従来の中国思想史研究において，医書及び医学関係文献が採り上げられ，正面から考察・研究の対象とされたことは殆んど稀であった。然るところ，本研究は，中国における古代医学の形成とその思想的基盤及び特質について攷覈することを目的としたもので，その成果は，当該研究分野に新機軸を開き，また，医史学，中医学研究においても殆んど未開拓の分野を研究したものとして，内外学界に貢献するところ少からぬものがあると認められる。

総じて，中国古代医学に関する諸資料は，文献学的に制約・問題が多く存し，具体的研究の対象として採り上げるには種々の困難があるが，資料取扱いの態度，資料解釈に概ね妥当性があり，論証は著実，導出した結論もほぼ正鵠を射ており，見るべきものがある。

個々の内容については次の諸点が注目される。第一に，中国古代医学の形成過程を考察し，呪術的医療から脱皮して「気」の概念に基づく合理的な疾病観が形成されたことを詳論し，特に『史記』倉公伝の記録を重視し，淳于意（倉公）の遺した診断記録を分析精察して，古代医家の疾病観の変化を具体的に跡づけたこと，第二に，『黄帝内経』の成立と書誌的研究において，『漢書』芸文志所載の『黄帝内経』と現存『素問』『霊枢』二書とを同一視する通説には根拠のないことを論定し，また，原始『素問』の巻数が通説の如く9巻でなく8巻であったであろうとの新説を提示し，且つ素・霊二書の成立期について，前漢末の『七略』以降，後漢初期にかけるとの見解を提示したこと，第三に，「内経医学」の全容を精察し，中国古代における医学を体系的に整理再構成し，そこに見られる医学思想の特質・性格を闡明し，特に心身観の特徴を中国古代思想との関連において導出したこ

と，「内経医学」における五行論の適用が論理的斉合と不斉合を生じている点を究明したこと，三陰三陽説の起源と後世医学に与えた影響を論じ，同説が医家の独創にかかる陰陽論の発展形態であることを詳述論到している点，これらの諸点は本論文における特に注目さるべき学術的成果であるということができる。

他面において，本論文全体の構成について言うならば，第一章，第二章の如き古代思想の考察，「内経医学」の成立と書誌学的研究，「内経医学」を中心とする医学思想の解明と研究課題が大きく三分されているため，論述の流れがやや停滞する嫌いがないでもない。副題に掲げた如く，あくまで「内経医学」の研究を中心に論文構成を試みる等，本論文末尾にまとめて掲げた引用原文の取扱いも含めて，いま一段の工夫が求められる。次に研究内容については，本論文は「内経医学」を中心とするいわゆる「北方医学」（黄河文化圏）に研究の重点を置いているが，江南文化圏の地域的特性として「湯液医学」の成立があったとする説も提出されているにもかかわらず，これについては言及がない。この説に対する著者の見解は否定的で，「湯液医学」は南方に固有のものでなく，北方にも見られるというが，「中国古代医学の形成」の研究を標榜する限りにおいて，「湯液医学」についても上の説の当否を含めた考察を加えることが望まれる。但し，著者はあらかじめ「内経医学」を中心とする研究に限定しており，このことはあるいは過重な要求とも言え，むしろ今後の研究に期待したい。

以上，これを要するに，本論文は多少の不備もあるが，全体として，医史学及び中医学研究にも関連して中国思想研究に特色ある一歩を進めたもので，学界に貢献するところが少くないものと認められる。

よって，著者は文学博士の学位を受けるに十分な資格があるものと認める。